



学校法人 聖学院

理事長／清水 正之 院長／山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <http://www.seig.ac.jp> E-mail pr@seig.ac.jp

聖学院ASF事務局 Tel 03-3917-8352

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科
・人間福祉学部／児童学科 こども心理学科 人間福祉学科
※2018年4月より、人文学部児童学科開設、心理福祉学部心理福祉学科開設
学長／清水 正之
〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究科／アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科／人間福祉学研究科
〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／山川 秀人
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／角田 秀明
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／佐藤 慎
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

■米国アトランタキャンパス

聖学院アトランタ国際学校

校長／エイハーン みな子
5505 Winters Chapel Rd. Atlanta, GA 30360 USA
Tel 1-770-730-0045

編集／学校法人聖学院 学院広報部
印刷／田宮印刷株式会社
デザイン／株式会社キュー・ジー
発行日／2017年6月22日

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（VISA、MasterCard）をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマホ、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい（P3Iもご参照下さい）。

<https://www.seig-asf.jp/fund/>



住所変更・お問い合わせは以下にお願いします。

- | | | | |
|------------------------|------------------|----------------|------------------|
| ○聖学院大学総務課（大学院・女子聖学院短大） | Tel 048-781-0925 | ○女子聖学院中学校高等学校 | Tel 03-3917-2277 |
| ○聖学院みどり幼稚園 | Tel 048-622-3864 | ○聖学院小学校・幼稚園 | Tel 03-3917-1555 |
| ○聖学院中学校高等学校 | Tel 03-3917-1121 | ○学校法人聖学院ASF事務局 | Tel 03-3917-8352 |

ASF NEWS

ALL SEIGAKUIN FELLOWSHIP NEWS

No.
55
Jun.2017

特集 聖学院の新しい教育 コラム 聖学院の先駆者、宣教師

「聖学院サポーター募金」ご協力お願いします。

インターネットでも寄付ができます。<https://www.seig-asf.jp/fund/>





百余年のミッションを未来に。

プロテスタント・ミッション・スクールの使命を遂行し続けている
聖学院が、未来を見据え、取り組んでいる「新しい教育」。
その充実のために昨年から始まった「聖学院サポーター募金」は
ASF関係者の反響のもと、前年度を上回る寄付件数となりました。
深く感謝申し上げますとともに、引き続き、より多くの皆様に
この支援プロジェクトをご理解いただき、
ぜひ担い手のお一人となっていただけますことを願い、本誌では
今、聖学院各校が取り組む「新しい教育」をご紹介します。
また、聖学院の教育の原点であるディサイプルス派の
宣教師たちの歩みを見つめ直し、大切に伝えてまいります。
1世紀を超えて未来に向かう聖学院の教育というミッションを
これからも、共に支えていただけますよう、お願い申し上げます。

INDEX	
理事長挨拶	02
聖学院院長・同窓生対談	04

特集 聖学院の新しい教育	
・聖学院大学／聖学院大学大学院	06
・聖学院中学校・高等学校	10
・女子聖学院中学校・高等学校	14
・聖学院小学校	18
・聖学院幼稚園	22
・聖学院みどり幼稚園	24
・聖学院アトランタ国際学校	26

コラム 聖学院の先駆者、宣教師	9・13・17・21・27

「聖学院サポーター募金」ご協力のお願い	28
オール聖学院フェローシップ規則	29
ASF募金要項	30
2016年度プロジェクト内訳	31
インターネットでの寄付のお申し込みについて	31
税制上の優遇措置について	32
ASF募金「振込用紙」の書き方について	33
賛助広告	34

女子聖学院短期大学記念室
（聖学院大学礼拝・講堂棟 [チャペル] 内）
中央のステンドグラスは、設計者、香山壽夫先生（東京大学名誉教授・元聖学院大学大学院教授）のデザイン。
チャペルは2004年完成、2006年日本芸術院賞受賞。

多元的な価値観のグローバル社会で
多様な人々と共に生きる力を養い
主体的に行動できる“良き隣人”を育む



清水正之

理事長挨拶

Shimizu,
Masayuki

PROFILE

学校法人聖学院理事長
聖学院大学長

清水正之

PROFILE●1947年横浜市生まれ。東京大学文学部倫理学科卒業後、同大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程修了。同博士課程単位取得退学。博士（人文科学）。2008年聖学院大学人文学部教授に着任。2015年聖学院大学学長に就任。2017年学校法人聖学院理事長に就任。

2015年より聖学院大学長を務めてまいりましたが、阿久戸光晴前理事長の任期満了に伴い、4月3日付けをもちまして学校法人聖学院理事長を拝命いたしました。大学長は引き続き兼務しつつ、幼稚園から大学院までの一貫教育体制を持つ日本有数のプロテスタント・ミッション・スクール、聖学院全体の発展のために力を尽くしていく所存です。

キリスト教精神をバックボーンに貫き、「神を仰ぎ、人に仕う」のスクールモットーを掲げる聖学院は、1世紀を超えて教育というミッションを遂行し続けてきました。2002年には、変わらぬ教育の根本精神と理念に基づき、自己革新に邁進すべく、「聖学院教育憲章」を制定するとともに、たゆまぬ教育の刷新と充実を図ってまいりました。



グローバルなキャンパス

学校法人聖学院は、創立時より宣教師がおり、ミッションスクールのつながりで、提携校留学なども積極的に進めてきました。駒込キャンパス各校での生徒の海外留学・体験は、早くから積極的に進められていますが（本誌参照）、聖学院大学では、中国、ベトナムをはじめとしたアジアやアメリカ、アフリカのケニアまでの12か国、約360名の留学生在籍しています。最近では、留学生在が中心となり、地域住民と交流し、海外の子どもに募金をするイベントなども企画されています。



卒業生はもちろん、 卒業生の保護者もずっと続く交流

聖学院では、幼稚園から大学まで在籍される方や、家族も聖学院という方がいらっしゃいます。在校時に培った友情や交流は、卒業後ももちろん、卒業生の家族までも、聖学院のさまざまな行事に関わり続けることが少なくありません。特に女子聖学院、聖学院中高の記念祭、聖学院小学校・幼稚園のフェアは、多くの卒業生やファミリーが訪れます。その雰囲気は、さいたま・上尾にある大学やみどり幼稚園にも引き継がれ、学園祭やバザーなどで、同窓生・後援会が家族で来場し、教職員と旧交を温める姿を毎年見ることができます。

そして2016年には、聖学院各校の新しい教育の取り組みを支援していただくべく、ASF（オール聖学院フェローシップ）において各校の同窓会が協力して支える「聖学院サポーター募金」がスタートしました。これまで、多数の皆様からの尊いご厚志が続々と寄せられておりますことに、心より感謝申し上げます。

グローバル化の潮流は勢いを増すなか、社会において、ますます価値観の多元化が進んでいます。その中で、一人の個として、その人らしい個性を発揮し、いかに主体的に行動することができるのか、どのように「人に仕う」ことで貢献が可能となるのかを、改めて捉え直すことが迫られています。多様な人々と共に生きていくことが必須の社会の中で、能動的な共生力を備えた“良き隣人”となることができ、いかにして育むのかということが、未来を志向する聖学院らしい人間教育の新たな目標として掲げられます。

海外のみならず、国内、地域に暮らしていても、多国籍で多彩な人々が隣人となりうる時代に、重視される共生力とは、他者との対話力、共感力、実践力という三つの力の具体化であると考えます。そして、これらは単なる知識として学ぶべきものでは

なく、現実との関わりの中で、体験を通して深め、それぞれの身につけていかれるものでありましょう。

こうした新しい教育の取り組みは、各校各園の個性を加味しながら、年齢や発達段階に応じた展開が行われております。例えば、大学においては、学問的裏付けられた専門的な知識を身につけることがこれらの力に必須となります。聖学院に共通しているのは、各校各園が、それぞれ主体的で能動的な体験的学習を基軸にすえていること、常に外部にまなざしを向け、内向きにならずに他者や社会的状況に鋭敏な感覚を養いながら、取り組んでいることです。私たちは、今置かれている場をふまえつつ、グローバルな広がりへと心と眼を向け、国境を越えたあるべき世界をめざしながら、聖学院全体を一層、開かれた場にしていきたいと考えています。

祈りによって、学びによって、さまざまな場において、人と人が「共にする」機会に恵まれた聖学院には、ある意味、とても家庭的な雰囲気を備えた、あたたかなコミュニティが築かれ、そこにつながる人の魅力が、大きな求心力を生み出しています。その宝を活かしながら、未来に貢献しうる主体的な“良き隣人”を育てていくために、いっそうのお力添えをいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

学校法人聖学院院長・同窓生対談

山口 博 × 柳澤 信成

Yamaguchi, Hiroshi

Yanagisawa, Nobushige

視野の広い大器晩成を育む自由な校風
豊かな人との出会いに恵まれ、
生涯の友人ができる学び舎



柳澤氏が手にするのは漆の蒔絵が施された完全オリジナルの「URUSHIのサクソフォン」。

母校の聖学院中学校高等学校校長を経て、このほど学校法人聖学院院長に就任した山口 博先生（女子聖学院中学校高等学校校長を兼務）。現在、世界に冠たるサクソフォンメーカーを率いる柳澤信成氏と山口院長は、中学～高校時代の6年間を共に過ごして以来、長く親交を続ける“生涯の友人”です。

柳澤 聖学院中学校に入学してから高校卒業までの6年間、あきれほど勉強しなかった私の成績は惨憺たるもの。でも、美術部顧問の曾我先生をはじめとする先生方には、本当に広い心で見守っていただきました。

山口 中学時代から絵を描いていた柳澤君は芸術家を目指したり、本格的な山登りに挑戦したり、自分のやりたいことに取り組んで才能を発揮していました。曾我先生が部員を連れて越後湯沢にスキーに行くとき、私も急遽、美術部に入って一緒にスキーに行ったことや、高校時代に山岳部に入った柳澤君たちと冬の丹沢に同行して、一緒にニンニクを焼いて食べた思い出もあります。当時は、旧校舎の美術室のダルマストープの周りで時間を過ごしたり、図書館の司書さんのところに集まって高校生同士で政治談議などを交わしたり、教室の外にも、かなり自由なたまり場がありました。

柳澤 5年間担任だった深町先生の自宅に仲間と押しかけて羽目を外し、ご迷惑をおかけしたこともあります。劣等生の私を案じた母が、中学校の卒業式の時、深町先生に「このままでは息子の将来が心配で……」と相談したところ、「この子は大器晩成だから、大丈夫ですよ」と言ってくれた、「その一言がずっと支えになっていた」と、母は死ぬ間際に打ち明けてくれました。

山口 きっと、先生方からそうした言葉をかけてもらい、安堵した家庭は少なかったでしょうね（笑）。今、日本の老舗サクスメーカーの社長として、世界を相手に勝負している柳澤君は、まさに大器晩成を体現していま

す。横社会という狭い枠ではなく、もっと大きな視野で人生が見られるようにしてくれることこそが、私は聖学院の教育の特徴であり、良さだと感じています。

柳澤 若い頃は好き勝手にやりたいことをやっていいし、失敗や、怒られるようなこともやっておいたほうが、後で経験として生きてきます。聖学院は、周りにかまってくれる人、しかってくれる人、ほめてくれる人、面倒を見てくれる人がいる学校でした。

山口 昔から聖学院には、生徒たちを信じて、伸び伸びと自由にさせてくれる、そこで人と深く関わるのでできる環境があって、個性的な先生方もたくさんいらっしゃいました。そういう伝統は今も受け継がれています。高校卒業後、神学校に入り、牧師になって各地に赴いていた私は、2007年に校長として母校に戻ってきました。現在は女子聖学院の校長ですが、生徒たちと接することとても楽しく感じると同時に、多彩な分野で活躍する同窓の素晴らしい先輩・後輩の方々と触れ合う機会が多く得られるようになったことは、大きな喜びです。

柳澤 どれほど自由で、人との出会いに恵まれていたかを知るようになって、私は聖学院に入ってよかったという思いをいっそう強くしています。

山口 それからもう一つ、聖学院では、死ぬまで友達でいられる仲間に出会うことができます。生涯の友人の存在は、この長寿社会の心強い財産に違いありません。

（続きは、2017年7月以降ASFのホームページで読むことができます。 <https://www.seig-asf.jp/>）



PROFILE

学校法人聖学院院長
女子聖学院中学校高等学校校長
聖学院中学校高等学校 卒業（63回）

山口 博

日本キリスト教団牧師。2007年聖学院中学校高等学校校長に着任。2012年聖学院副院長兼キリスト教センター長（～2017年3月）。2016年女子聖学院中学校高等学校校長。2017年聖学院院長に就任。



PROFILE

柳澤管楽器株式会社 代表取締役社長
聖学院中学校高等学校 卒業（63回）

柳澤 信成

祖父・柳澤徳太郎氏が創業し、父・孝信氏が世界有数のサクソフォンメーカーに躍進させた柳澤管楽器に入社。現場を経て、1994年社長に就任し、世界唯一のサクソ専門メーカーを率いる。

二人の在籍時にもあった、聖学院中高の椎の木の前で。



国際交流会（地域共生広場1cafe）

聖学院大学／聖学院大学大学院

（さいたま上尾キャンパス）

共生社会の中で良き隣人となる教育に取り組む

聖学院大学では、大学のモットーである「神を仰ぎ人に仕う」の理念を、多様な人々から成り立つ共生社会の中で「良き隣人となる」という具体的な人間像として捉え直してきました。東日本大震災が大きな契機となり、多様な価値背景を持つ地域と共に生きる大学として、地域への眼差しを育てる教育に、2011年から本格的に取り組んでいます。学びの中で個々の学生が専門的な知識を培いつつ、他者との対話力・共感力・実践力という3つの力、すなわち「この社会であるべき共生力」として具体化することを本学らしい人間育成の目標としています。

具体的な取り組みとして、一つめは岩手県釜石市における学生ボランティア活動の後押しで、学生も自分の力が役立つと実感でき

るようになりました。二つめは、上尾市・さいたま市などでも地域防災の試みが始まり、本学の学生が参加するようになりました。三つめは、さいたま市や上尾市などの自治体と包括的な連携協定が結ばれ、大学の所在する地域との関係が深まりました。そこで、カリキュラムを整え、地域連携教育センターを作り、教員の地域貢献も後押しするなど、大学全体で地域志向を高めていったのです。

人間に共通の普遍性に基づく大学での学びと同時に、社会の実践的課題は個々の場・状況の中で課せられます。「共生地域」というローカルな実践の場が、まさにグローバルな社会の課題に関わっている…その体験が、問題解決をはかる力を養うものとなるでしょう。

TOPICS

1

ボランティア活動支援センターを通じ 被災地復興を応援

東日本大震災でのボランティア活動を大きな契機として、聖学院大学では「支援をしたい人」と「支援を必要とする人」を結ぶ「ボランティア活動支援センター」を設立しました。復興支援ボランティアチーム「SAVE」の活動拠点でもあり、スタディツアーや被災地支援プロジェクトなど、学生にしかできないさまざまな活動を行っています。

具体的には、釜石市での冬の「サンタ・プロジェクト」、春の「桜プロジェクト」、夏の「よいさっ!プロジェクト」などがあります。

2015年からは、宮城県仙台市での復興支援として「農業支援」「遊び広場」の活動も展開しています。

バイスや提案、会議委員への就任依頼など、自治体との連携推進の為に窓口体制を構築し、地域連携活動を積極的に展開しています。また、2015年度末に大学1号館に整備された「地域共生広場1Cafe」は、同センターの窓口が置かれ、地域自治体や団体などとの会議やミーティング等の場としても機能しています。

ボランティア活動支援センターでは、埼玉県内のボランティア活動に取り組む大学生のネットワーク組織「さいたま学生ボランティアネットワーク〜わかたま〜」の運営もサポートしています。

また、「学生と共につくる、育つ」センターを目指し、2012年のセンター開設時から年1回、「聖学院大学のボランティア活動を盛り上げる」学生コーディネーター養成を目的とした講座も実施しています。

◆地元地域の連携活動も

2013年4月、「聖学院大学地域連携・教育センター」を開設し、さいたま市、上尾市、春日部市、埼玉県、釜石市などを中心に、研究への協力依頼や、専門的知見によるアド



釜石の子どもたちと遊ぶ学生

TOPICS
2地域で生きることを学ぶ
「釜石学」

聖学院大学では東日本大震災以降、継続的に釜石での復興支援活動を行っており、多くの学生・教職員が釜石の人々との絆を深めてきました。2014年1月29日には、釜石市と連携協定を結び、その関係を強化しています。

2013年、人文学部に地域理解の科目として「埼玉学」の授業ができたのを端緒に、その後、全学カリキュラムとして2015年度から「釜石学」を開講しました。

歴史的にも数度の地震や津波による被害を受けながら、そのたびに立ち上がってきた東北には、風土的な特性や、そこに暮らす人々の精神性が深く根ざしています。そうした東北の中でも、本学と関係を深めている釜石市とその周辺の「歴史」「風土」「精神性」「震災以降の歩み」「復興支援ボランティア活動」をテーマに開設された科目が「釜石学」です。

また、釜石市はラグビーの町としてグローバル的な地域でもあり、本学の掲げる「グ

ローカル」な場としてのモデルとして考えていきます。「東北に生きる」ということを通じて「地域で生きる」ということはどういうことかを考える内容となっており、本年度は本学学生100名が受講しました。

また、2016年には「地元学」として、本学のある上尾市戸崎地区を中心に学ぶ科目を開設しました。さらに2017年度は、隣接する宮原地域を学び課題を理解する科目「宮原地域学」を開講しました。この科目はさいたま北商工協同組合の協力を得ています。

さらに、「コミュニティサービスラーニング I・II」も開講。この科目は、地域版インターンシップという性格を持ち、PBL (Problem Based Learning=問題基盤型学習) の手法を活用しています。自治体やNPOなどの企業とは異なった形で地域に関わっている団体をインターンシップ先として学びつつ、地域の課題を理解し、解決方法を学ぶ内容です。



釜石よいさを踊る学生たち

TOPICS
3「私立大学研究ブランディング事業」への
応募を準備中

「釜石学」のように、2015年から毎年地域に関する科目を揃え、地域の視点を持った人材育成に取り組んでいる聖学院大学ですが、もともと本学ではコミュニティ政策学科があり、まちづくりなどに関心を抱く学生は少なからず存在しました。それが、ボランティア活動や地域活動を通じて、各学科の専門を生かしながら地域に貢献できることを学び、「自分は役に立てる」と学生が自信をもって地域の中に出ていけるようになったことが大きな収穫と言えるでしょう。

また、本学卒業生の中にNPOに就職する者も出始めていることも、「共生社会の中で良き隣人となる」を目指した新しい教育の成果の一端ではないでしょうか。

現在、これら本学の取り組みを文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」のAタイプ（地域の経済・社会、雇用、文化の発展や特定の分野の発展・深化に寄与する取組）に応募することを準備しています。学生

の教育だけではなく、教員の研究フィールドとしての「地域」も確保し、さらにはそれを学生の教育の場へとフィードバックさせたい。そうして、本学の教育目標である「良き隣人を育てる」とことと「地域で生きる」ことの中で共生力を実践できる人材を育てたいのです。



宮原駅前でのさいたまKI-TAまつり(さいたま北商工協同組合主催) 留学生も参加しました

聖学院の先駆者、宣教師 1



チャールズ・E・ガルスト宣教師

本コラムでは、聖学院ゆかりの宣教師や先駆者を紹介しながら、関連した最近のニュースや記念碑などをお伝えします。

聖学院大学には「ガルストホール」「チャールズ・エリアス・ガルスト奨学金」と、ガルストの名を冠した施設や奨学金があります。学校法人聖学院は、プロテスタント・キリスト教の一教派である、アメリカのディサイプルス派の宣教師によって創られた学院ですが、その最初の宣教師の一人が、チャールズ・E・ガルストです。

ガルスト夫妻は1883年、スミス夫妻とともに来日、東

北の地・秋田を選び、伝道を開始します。1890年、宣教師団の方針に従って、ガルストは活動の拠点を東京に移し、全国に伝道するとともに、人々の貧しさや社会の不公平を見過さず、社会問題にも取り組みました。こうしてガルストは近代日本の農民運動や労働組合運動の先駆者となりますが、過労のため1898年、日本の地で45歳の生涯を閉じました。



青山霊園にあるガルストの墓。墓碑には「FAITH IS THE VICTORY」と彫られています。



メーコック財団にて（2016年12月）

聖学院中学校・高等学校

（駒込キャンパス）

体験だけで終わらない、主体性や探究心を育む 「進化形」タイ研修旅行

聖学院の中学3年生から高校2年生の希望者が参加するタイ研修旅行は、20年以上続く伝統行事です。タイ北部チェンライ県で山岳少数民族の子どもたちを保護し、教育の機会を与え自立支援を行う活動を展開している「メーコック財団」という施設の創設に本校前校長の戸邊治朗が深く関わったつながりで、毎年12月に現地を訪れ、交流やボランティア活動が行われてきました。

この研修旅行に参加すると、生徒たちが大きく変わります。とても活動的になったり、リーダーシップが取れるようになったりと、目に見える変化が現れるのです。それならば、この研修旅行のプログラムをもっと機能的に磨きあげ、生徒が学ぶ力を向上させる機会にしようと考えたのが「進化」の始まりでした。

本校の中には突き抜けて能力の高い生徒もいますが、まだ自分の力を出し切れていな

い生徒が少なくありません。彼らの「自己肯定感」を上げてあげたい。自分の持っている‘神様から与えられた賜物’をきちんと自覚し、それを自分で伸ばしていけるような力をつけてあげる必要があると感じていました。そして、「自分はこんなもんだ」と思い込んでいる生徒の殻を破るにはどうしたら良いか一生懸命考えて実行したのが、12泊の2016年度タイ研修旅行だったのです。

事前学習としてまず実行したのがチームビルディングでした。「せっかく日本を離れるのだから、失敗を恐れずにチャレンジする」、その安心感を支えるのはお互いの温かい信頼関係です。レゴ・ブロックを使って自分を表現し相手を理解する手法（レゴ®シリアスプレイ）を取り入れ、参加者31人がチームとして結束すべく、土・日に合宿を行いました。

TOPICS

1

国連「持続可能な開発目標」との連動 ～ボランティアからビジネスへ

プロジェクト型のワークショップを何回も行ったことは、2016年度のタイ研修旅行の大きな特色と言えるでしょう。プロジェクト型とは、目的を持って、その目的を達成するために準備を行い、現地でプランを実行してその成果を評価する取り組みです。実例として、現地でフリーマーケットにも参加させてもらいました。

今回の新機軸の1つが、国連の掲げた「持続可能な開発目標（SDGs）」との連動です。SDGsには「あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」「飢餓を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する」など17の目標が掲げてあり、その一環として近年、コーヒーのフェアトレードなどが注目されています。

今回のタイ研修旅行でも、現地のコーヒー農園で手作業によるコーヒー豆収穫ボランティアを体験しました。その一方で、フェアトレードの恩恵が実際には個々の農家に

まで届いていない現状も学習し、「ボランティアだけでは継続性がない。ビジネスへと成長させることが大切である」と、問題点の深部にまで考察を巡らせたのは、従来には無かったプログラムです。帰国後、実際に神楽坂にてカフェをオープンし、生徒自身がPRに役買うという発展もありました。

また、SDGsと連動したカードゲームがあり、「経済を優先させると環境が悪化するが、環境を優先させすぎると経済が低下し、結果的に福祉が行き詰る」といったバランスの難しさも学びました。こうした学習を経て、将来の進路としてビジネス系や国際系に興味を持つ生徒も現れています。

このように仲間と一緒に体験し、仲間と一緒に考え、自分と向き合う機会を拡げるといふアクティブ・ラーニングは、まさに「総合学習」であり、そのための方法論が今回のタイ研修旅行である程度確立できたという手応えを感じました。



チェンライカフェ探索（2016年12月）

TOPICS
2ループリック（評価基準）の導入で
具体的に見えてきた生徒の成長と課題

タイ研修旅行は11月の事前学習に始まり、1～3月のレポート作成を経て、11月の文化祭での発表で完結する長丁場です。

数年前からタイ研修旅行で取り入れているのが「ループリック」です。ループリックとは具体的な評価基準であり、絶対評価を行うための「ものさし」と言えるでしょう。「リーダーシップ」「異文化異言語コミュニケーション」「社会事象への関心と態度」「情報収集と体系化」について、研修前・研修中・研修3か月後の3回計測。生徒一人ひとりについて、何がどれくらいできるようになったのかがグラフで明確に分かります。

中3生のI君は、「以前の自分はすべてを人に任せるばかりで、自分ではまったく動き出しませんでした。何をするにも親とか友達に聞いて確認をしていました。そんな自分が、少しぐらいのことは人に聞かずに自分で判断するようになりました。帰国した時、タイで味わった喜びと興奮が止まりませんでした。また行きたいと思いました。次に行く時

はより積極的に動き、活躍したいと思います」と、主体性がアップした感想を書いています。

生徒会のメンバーや記念祭の実行委員にタイ研修旅行の経験者が多く含まれている、というエピソードは、このプログラムの特性を表しているかもしれません。

以前はこのような具体的な評価基準を設けておらず、タイ研修に行って驚いて帰ってきて、「不幸な子どもたちを見て、私は恵まれていると実感した」という程度の感想文を書くのが精一杯でした。そこに留まらず、一歩前に進んでほしいというのが我々の願いであり、その指標となるのがループリックなのです。

この評価基準があればこそ、さらに改善すべきポイントも見えてきます。現在感じているのは、探究力の不足。きちんと調べ、もっと深く考えることが2017年度の課題です。



チームビルディングワークショップ（2016年11月）

TOPICS
3人間的成長と学力向上は教育の両輪。
「チーム聖学院」で、あえて二兎を追う

主体性を引き出すためのワークショップ型の授業は、聖学院中・高全体に常に組み込まれ広く根付いているもので、タイ研修旅行だけが特別な存在ではありません。

例えば中3生が学年全員で取り組んでいる「クエストカップ」は、企業に対してプロジェクトを提案するもので、全国大会まであります。この全国大会に出場した生徒は、高校に進んでからすぐ伸びました。

また、高3生の「総合的な学習の時間」では、現在「東京北区プロデュース」の授業があります。様々なデータを分析しながら、北区・豊島区・荒川区・板橋区の魅力発信をプロデュースしています。

もちろんこうしたプログラムと並行して、学力向上にも真摯に取り組んでいます。生徒の人的成長を促しながら進路実績も出すことは、教員に大きなプレッシャーを与えますが、それは教育の両輪であり、あえて「二兎を追う」覚悟で臨んでいるのです。折しも

これから入試の形態が変わってくるため、自分で考える力を養うという方針は、時代にマッチしたものと言えるでしょう。

新しい試みは、限られた教員だけが独自に取り組んでいるものではありません。その過程や成果を全員にフィードバックし共有財産として定着させる……私たちは聖学院をチームビルドしているのです。



SDGsワークショップ（2017年3月）

聖学院の先駆者、宣教師 2

聖学院中学校初代校長
石川角次郎先生

初代聖学院中学校校長の石川角次郎先生は、1867年栃木県足利生まれ、15歳で上京し、1883年、植村正久牧師から洗礼を受けます。

その後、東京大学予備門に入学したにもかかわらず、東京大学に進まず、渡米、サンフランシスコにあるユニバーシティ・カレッジに入学、英文学を専門に学び、ディサイプルス派教会の会員となったのでした。

1891年帰国後は、伝道の傍ら、その英語力を買われ、東京専門学校（のちの早稲田）について学習院の教授として活躍します。しかしガイ博士の、神学校およびキリスト

教教育を中心とした中学校の設立、そして校長就任への熱心な求めに応え、石川先生は学習院教授の職を捨て、聖中初代校長に就任したのです。1903年に本郷で発足した聖学院神学校が翌年滝野川に移転し、この校地の中で1904年に聖学院英語夜学校、1906年聖学院中学校が設立されました。



多磨霊園にある、石川角次郎先生の墓。背面には、「我所求者爾也非爾所有也」と刻まれています。（わたしが求めているのは、あなたがたの持ち物ではなく、あなたがた自身だから（コリントの信徒への手紙2 12章14節））



女子聖学院中学校・高等学校

(駒込キャンパス)

グローバルなアンテナを伸ばす 国際理解教育プログラムの必修化

一人ひとりの個性を大切にし、生徒の成長に寄り添う教育を展開する女子聖学院は、創立112周年を迎え、さらなる飛躍を目指して5つのmissionを掲げて教育改革を行っています。

- ① 授業改革+学習支援システム
- ② ことばの獲得への注力
- ③ 国際理解教育の充実
- ④ 課題探求型学習の導入
- ⑤ 自分の良さと出会う学校

一本一本が独立して見えるmissionですが、それぞれが関連性を持って絡み合っています。従来から行ってきた取り組みにもそれ

ぞれ新しい要素を加えて、教育をさらに充実したものにしていこうと考えているのです。

その中で特に今回ご紹介するのは「国際理解教育の充実」です。

女子聖学院の国際理解教育は2015年度、①英語教育への注力、②積極性をより意識的に評価する、③アウトプット・発表する場を積極的に設ける、という3点を重視したカリキュラムに生まれ変わりました。中1～高2で国際理解教育プログラムが必修化され、希望者対象の海外滞在プログラムも、短期留学、ホームステイなど、行先は4カ国・全5種類に拡大されました。

学年ごとに2～3日間、全員が参加する通学型の「国際理解教育プログラム」では、様々な発表や劇、ディベートやディスカッションなどを行います。生徒たちにとっては、英語を「使う」実践の場として、また、視

野を広げる貴重な体験になっています。実際に人と会って話をする体験から、五感で多くを学び取り、グローバルなアンテナを伸ばしてもらいたいと願っています。

TOPICS

1

英語を使う実践の場で視野を広げる全員参加の Global 3 day Program

中1～高2で必修化された国際理解教育プログラム。どの学年もアメリカ・ヨーロッパ・中東・アジア各国のネイティブとのコミュニケーションを通して、文化・言語を学び、国際理解を深めると同時に、英語で考え、英語で発信できる力を養います。

【Grade-1】

Global Starter Program

いろいろな国から集まった先生に出会い、異文化に触れます。世界共通言語である英語への興味・関心を高め、人前で発表することにも挑戦します。

【Grade-2】

Team Building Program

これまで学習してきたことを実際に使って、グループごとに英語スキット（寸劇）を作り、チームワークとプレゼンテーションの基礎を学びます。

【Grade-3】

English Skill Up Program

海外で使える、より実践的な表現を学び、海外生活を疑似体験したロールプレイなどを通じて、本格的なプレゼンテーションに向けた発信力を鍛えます。

その中心軸として組まれた「Global 3 day Program」は、「Grade-1（中1）」から「Grade-5（高2）」まで学年ごとの5段階のプログラムが設定されており、生徒たちは明確な目標を持ってステップ・アップしていきます。

【Grade-4】

Self-Expression Program

プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートのスキルを磨くことがテーマです。自らを知り表現するライフマップを作ります。

【Grade-5】

Self-Development Program

世界中から東大・ICUなどに集まった留学生数十名がリーダー役となり、小グループに分かれてディスカッション、ディベート、プロジェクトワークを行う、5年間の集大成のプログラムです。



TOPICS
2新鮮な体験を大切にした中学1年生対象の
Global Starter Program

「国際理解教育の充実」の一環として、中学1年生対象の必修プログラムでは、今年度も4月下旬に国際理解教育プログラムの「Grade-1」にあたる「Global Starter Program」が、2日間にわたって行われました。

中1生が10人ずつ12クラスに分かれて行われ、外部から招いたネイティブ教員と一緒に会話やリスニングだけでなく、プレゼンテーションなど様々なアクティビティに取り組みました。アメリカやイギリス、フィリピンなど多国籍のネイティブ教員が、途中でクラス毎に入れ替わるため、いろいろな英語に触れられる貴重な体験となりました。

こうした国際理解教育プログラムは、数字で評価を下さなければならない従来の英語教育とは大きく異なり、体験を大切に、感性や表現力を養うことを重視しています。国際理解や異文化コミュニケーションのツールとして、本物の「使える英語」を楽しみながら身につけて欲しいと願っています。

◆中学生にも海外留学の
機会を

女子聖学院では、海外で学ぶチャンス多くの生徒に与えるため、ニーズに合わせて選べる海外研修プログラムを用意しています。

高校生を対象としたものが多い中、「中学生のうちから海外での経験を」という思いから、立教英国学院（全寮制）へ1年間留学できるプログラムを用意しました。日本の学習指導要領に基づく授業を受けながら、ヨーロッパ文化に触れて生活する中で品格ある国際人としての素養を育みます。習い事として乗馬やバレエなど、現地の先生からレッスンを受けられるのも魅力です。「百聞は一見にしかず」で、実際に海外で生活することにより、英語の“感性”と、英語がずんと頭に入ってくる感覚が身につきます。

TOPICS
3英語で心を伝える
高校生のスピーチコンテスト

高校生による英語のスピーチコンテストは、女子聖学院で長年大切に継承されている伝統行事です。各学年から3人ずつ選抜されたスピーカーは、自らの考えや体験をもとに自由にテーマを決め、約4分間、英語による熱弁をふるいます。

内容は家族や学生生活といった身近なものから世界が抱える社会問題まで広く多彩で、高い英語力と表現力の豊かさに来場者が圧倒されるのが通例となっています。外部から招いたネイティブ講師2人が審査にあたり、発音や話し方、内容などを総合的に評価します。審査の結果、学年とは関係なく、内容と英語力から上位入賞者3人が決まります。

コンテストは、まず高校生全員が春休みの宿題としてスピーチ原稿を提出するところからスタート。次に原稿の内容で選抜が行われ、選ばれた生徒を対象にスピーチのオーディションを実施します。選ばれた生徒

はみんなの憧れの学年代表として、誇りを持って本番のステージに立つのです。もちろん、選抜されなかった生徒も、自分のことのように喜び、あたたかい応援の拍手を送ります。

スピーチコンテストを通じて「英語をツールにして心を伝える力」が育まれ、歴史の中で脈々と受け継がれるのです。



聖学院の先駆者、宣教師 3



女子聖学院初代院長
バーサ・クロウソン先生

1905年11月1日、女子聖学院は築地A14番地に神学校として開校しました。当所は、外国人居留地でミッションスクールが多数存在しており、14番館は宣教師、ジョン・マッケレーブ先生の居宅でした。開校式では、H.H.ガイ博士

が講演、R.D.マコイ夫人がオルガン、P.A.デービー夫人が歌の指導をし、バーサ・クロウソン院長をはじめ3人の教師のほか、生徒10人が参列したと伝えられています。翌年、女子聖学院はロング氏の寄付金によって現在の滝野川村中里（当時）に土地を購入、移転しました。

2005年10月23日、現在の地番、明石町6番24号に、故・清水政雄氏（NPO法人築地居留地研究会初代理事長）の仲立ちで、所有者、国際紙バルブ商事株式会社様のご厚意により、敷地内の一部に「女子聖学院発祥の地」の記念碑が建立されました。記念碑の右横には、女子聖学院発祥にまつわる碑文が彫られています。



女子聖学院
発祥の地の記念碑



聖学院小学校

(駒込キャンパス)

学びの力をiPadで伸ばし、 放課後も安心・安全の教育環境作り

聖学院小学校の教育は、子どもたちの学ぶ意欲を育て、引きだし、伸ばしていくことを大切にしています。そのために、経験豊かな教師が教材の開発にも携わり、日々の授業に工夫を凝らしながら一貫性のある指導を行っています。

その一環としてiPadの活用をすべての教科で進めており、生徒たちも楽しみながら熱心に取り組んでいます。新校舎には全教室にプロジェクターが完備されているので、ノートとしてiPadに書き込んだ内容を投影して自分の考えを発表したり、クラスメイトの考えと比較したりすることが瞬時にでき、

「表現する力」「共に学ぶ力」が自然に育まれます。

また、各教室に無線LANが整備されており、インターネットで調べものをするのも容易です。与えられるのではなく活きた資料を自ら調べることで、アクティブ（能動的）な学習の姿勢を身につけます。

聖学院小学校では、以前から活動を中心とした授業は行ってきましたが、2013年にライティングワークショップ「作家の時間」を全学年で導入したのが、学校をあげてのアクティブラーニングのスタートと言えます。その後、2013年度よりiPadを全教師と児

童用50台導入したところからICTを活用したアクティブラーニングが始まりました。

本学でICT教育が大きく変わった契機は、仮校舎そして新校舎への移転でした。それまでもコンピュータ室はありましたが、新校舎はあえてコンピュータ室をつくらず、教室でiPadで学習する形態にしました。それに伴い、Wi-Fi環境を整えて、iPadの特徴を十分に生かすことができる教室環境になったのです。



TOPICS

1

i PadなどICTを活用した アクティブラーニングを導入

教師がiPadを使う授業では、使用する資料や机間巡視したときに撮影した児童のノートなどを、Apple TV にWi-Fiで接続されているiPadや、書画カメラを通して前面のスクリーンに投影し、共有しています。

一方、児童がiPadを使う授業では、個人、あるいはグループで自分の考えや調べてきたことを持ち寄ったり、プレゼンテーションをしたりしての学び合い活動をしています。また、同時書き込みの機能により、グループでのまとめや新聞づくりを一斉に行うなどデジタル模造紙としての活用も行っています。

一斉授業ではないため、子どもたちの間で学び合いが起きようになり、分からないから諦めてしまう傾向にある児童にも、積極的な学習姿勢がみられるようになりました。

また、子どもたちは操作をすぐ覚えてくれるので、操作を教える時間をとることもほとんどなく、すぐに授業の本題にはいることができますというのもiPadの利点です。さらに、機材はそのままプレゼンテーションでも使

えるので、学習した結果を見える形で、友だちに伝えるという学習の流れが、自然に行えるようになりました。

現在は1年から3年は50台のiPadを共有し、4年生以上は個人のiPadを所有して自由に使える環境になっています。

今後は、校外学習や宿泊行事での活用を促進したり、クラブ活動や総合の授業で進めてきたプログラミング学習を系統立てて行ったりしたいと考えています。さらに、iTunes U の活用もいろいろな授業で積極的に行っていきたいと願っています。

また、アクティブラーニングというと、どうしてもICTというイメージがありますが、これまで続けてきた、ICT機材を使わない「ライティングワークショップ（作家の時間）」や、4人グループを基準に全員が役を与えられ、信頼関係の元に学習活動を行う「協同学習」もさらに進めていきたいと考えています。

TOPICS
2放課後を安全に楽しく過ごせる
アフタースクールを開始

共働き家庭が多くなり、学校が終業したあとの子どもの預け先に困る家庭が増えてきました。聖学院小学校でも同様です。

そこで、子どもたちに「安全で豊かな放課後」を提供するため、放課後NPOアフタースクールと連携し、2017年4月に「聖学院アフタースクール」が誕生しました。4月10日から14日までの預かりと習い事トライアル期間を経て、5月8日から定期の預かりと習い事プログラムを本格的に開始しました。

聖学院アフタースクールは、聖学院小学校の教育理念を背景にその特色を生かした安心、かつ、安全で豊かな時間を過ごせる居場所です。聖学院小学校の先生方と連携し一体となって企画・運営していきます。このアフタースクールの特色は3つあります。

1) 授業のある日は毎日18:30まで、宿題をしたり、さまざまなプログラムを体験したりしながら、学校内で安全に過ごせます。放課後もいつもの友だちと遊べて、また異学年との交流も可能です。

2) 夏休みなどの長期休暇期間中もお子様をお預かりし、学校で一日過ごすことが可能になります。

3) 習い事感覚で楽しいプログラムに参加できます。曜日を指定しての定期的なお申込みのほか、ご家族の方のご都合にあわせて特定の日程のみの参加も受け付けます。

基本は、預かりがメインです。学校の宿題や自主学習のための時間としても活用できるので、ご自宅からドリルなどを持参することも可能です。みんなで宿題を一緒にしたり、ゲームや校庭で放課後NPOのスタッフのみなさんと遊んだりします。

終礼後は学校内のアフタースクールへ移動しますが、アフタースクールに入退室した際は保護者へのメール配信を行っています。また、15時30分以降は軽食やおやつも提供します。



◆子ども一人ひとりに合わせた時間を過ごせるような充実したプログラムを

習い事プログラム（預かりを契約した家庭のみ）は、サッカー教室（月）、ミュージカル（月）、ピアノ（月・木）、書道（火）、そろばん（水・金）、キャンパス（木）、チアリーダー（金）などのプログラムがラインナップされており、児童は希望したプログラムを受講することができます。

預かりを希望した児童対象に、月1回アフタースクールのスタッフが企画した単発プログラムが予定されています。5月には囲碁と、サイエンス教室を企画。6月にはドラムセッションをメインとしたジャズ教室が予定されています。

子どもたちも大変楽しく活動しています。特にご家庭の反応はよく、会員登録は1ヶ月

も経たないうちに100名を超える程でした。習い事のプログラムは、総勢119名の児童が希望し、それぞれのプログラムを受講しました。

子どもたちにとって充実した放課後にするために、子どもの興味・関心をしっかり把握し、子ども一人ひとりの得意・好きを見つけて自信に繋げていき、興味を広げ、「好き」を深める時間にしていきたいです。これからも充実したプログラムを企画したいと考えています。



聖学院の先駆者、宣教師 4



デージー B. エジャトン先生

2017年3月27日、宣教師、デージー B. エジャトン先生が、アメリカのインディアナ州インディアナポリス市にて逝去いたしました（95歳）。

エジャトン先生は、1921年12月米国ルイジアナ州生まれ。1941年ノースウエスト州立大学卒、ケンタッキー大学修士課程修了後、レキシントン神学大学、ミシガン大学、イェール大学などで学びました。1949年、宣教師として来日し、日本語学校で学んだ後、1950年より1971年まで、女子聖学院中高、聖学院中高等（注）で英語科の教諭として勤務、女子聖学院短期大学の創設に尽力され、短大

のチャプレンとして教鞭を執りました。聖学院理事（1959年～71年）、評議員（1954年～71年）も務められました。また、一方で、UCMS（共同クリスチャン伝道協会）の日本における代表も務められました。1971年、帰米後もUCMS本部と、聖学院諸学校、旧基督教会派諸教会との諸連絡に力を尽くされました。

注：聖学院小学校でも教えられたという記述が、Global Ministryのサイトにあります。

http://www.globalministries.org/daisy_edgerton



聖学院幼稚園

(駒込キャンパス)

心と体を健やかに育む給食と体育遊びの導入

2013年、創立百周年を節目として旧校舎の伝統・良さを継承しつつ、聖学院幼稚園の新しい百年に相応しい快適で安全な園舎ができあがりました。ここでは、集団生活の中で「遊び」と「ことば」を大切に発育段階に応じた保育を行い、一人ひとりの個性と能力を伸ばし、元気な子どもになるよう心掛けています。

その一環として新しく導入したのが、週2回の「給食」と、週1回の「総合体育研究所の指導員による体育遊びの時間」です。給食は2013年4月から、体育遊びの時間は2016年4月から取り組んでいます。

給食を導入したのは、食育について考えていく上で給食を導入することが必要であると

考えたからです。愛情のこもったお弁当の良さも大切にしていますが、一方、食への偏りも見られます。幼児期に様々な食材を使ったみんなと同じ給食を大勢でいただくことにより、偏食が改善されたり、「食」への興味・意識が変わったりすることを期待しています。もちろん、安全安心の食材を使い、栄養バランスにも細心の配慮をしています。

ただし、お弁当持参であることを希望して入園される方がいる事も考慮し、給食は週2回、あとの日はお弁当持参のかたちを取っています。

一方、「総合体育研究所の指導員による体操の時間」は、幼稚園では「体育遊び」と呼んでいます。2015年度までは担任教師に

よる発達段階に応じた体育遊びを行っていましたが、専門知識とスキルを持った指導員導入により、子どもたちがより楽しく、そして

正しく運動能力を身に付けることができると考えて導入しました。

TOPICS

1

育児支援にも繋がる、週2回の温かな「給食」

お弁当持参であることを希望して入園される方がいる事も考慮し、週2回の給食とお弁当持参を併用するかたちをとっています。

お家の方のご都合を考慮した結果、週明けの月曜日、親子共に疲れが見られる金曜日に給食を行うことが育児支援にも繋がるであろうと考えました。今年で5年目になりますが、お弁当・給食の良いバランスがとれていると感じています。

お母様が作られるお弁当は勿論ですが、お部屋でよそってもらい温かい給食も楽しみにしている様子がうかがえます。苦手な物に

も挑戦し、克服できた時には、子ども本人が満足感や自信を得ることに繋がっているようです。保護者からも「食べられるようになったものが増えた」と喜んでもらっています。

今後も給食とお弁当持参併用のスタイルは変えずに行きたいと思います。給食を通して、子どもたちが様々な食材に興味を持った、保育者自身が日々の保育の中に「食育」を意識したりする働き掛けが出来るようにと考えています。

TOPICS

2

新鮮で楽しく運動機能を向上させる「総合体育研究所の指導員による体育遊びの時間」

「体操」の対象は、年中・年長組の2学年で、毎週火曜日を「体育遊びの日」としています。年中組は1クラス30分、年長組は1クラス40分で指導して頂いています。カリキュラムは総合体育研究所の方で立ていただいています。

担任との時間が多い保育の中に、週に1度ではあっても特別な先生との時間は子どもたちにとって新鮮であり、気持ちを切り替えて体育遊びの時間に臨むことができます。

また、男性教師との時間も特別な楽しい

ものになっているようです。これからも子どもたちが楽しみながら運動能力を向上させてくれることを願っています。





聖学院大学留学生と園児の交流

聖学院みどり幼稚園

(さいたま上尾キャンパス)

一層必要とされる国際理解に対応した 英語教育と異文化交流を

聖学院みどり幼稚園では、初代W.G.クレー園長の時代より国際理解教育に対する高い関心を持っていました。その後、鈴木健一園長の時代にネイティブの講師による「English Time (英語の時間)」を2002年度から年長クラス対象にスタートしました。これは、外国人と触れ合いながら言葉と文化の違いを理解し、さらには英語を使ったゲームや歌やダンスを楽しむことなどを通して英語に親しむことを目的としたプログラムです。

また、2003年度からは全園児を対象とした自由参加プログラムとして「英語であそ

う」を開始したものの、園児や保護者の関心が十分とは言えずに2年間で中断したという経緯があります。しかし、近年の時代的背景の変化もあって、国際理解教育の一層の進展を図るべく、2015年度より「English Time」を年中クラスの2学期から実施する運びになりました(原則毎週火曜日各30分程度)。

さらに2016年度からは、聖学院大学の外国人留学生と園児達が交流できる機会を初めて設け、初年度はタイとケニアからの留学生が園に来てくれました。

TOPICS

異文化的背景を持つ人々と「共に生き、共に感動する喜び」を幼児時代から

近年、多くの外国人が日本を訪れ、逆に日本人が外国を訪問する機会も増えていきます。そのことに伴って、国際語としての英語教育の重要性も一層増えています。さらにそれは英語圏・ヨーロッパ圏のみならず、アジアやアフリカの国々との交流も、今後ますます活発となることが予想されます。

今世紀は、国や文化を超え地球全体として取り組まねばならない課題が増えています。未来社会をたくましく生きる子ども達に必要なとされる「基礎力」は、文化や価値観の違いに対する寛容さとグローバルな視点を持って主体的に行動できる能力でしょう。その第一歩として、異なる文化的背景をもつ人々と「共に生き、共に感動する喜び」を、柔軟な感性を持つ幼児時代に味わって欲しいのです。

「English Time」に対する評価は概ね「大変良い」で、卒園後も継続して実施して欲しいとの要望が保護者からもあります。園児達が「English Time」を楽しく過ごしていると

聞き、保護者の方々の関心が高まって、クラスの参観なども増えました。今後もコミュニケーション手段の一つとして、楽しく学べる英語力の向上に努めたいと思います。

一方、始まったばかりの留学生との交流会については、相互に良い刺激を与え合えるプログラムであり、今後も充実させていきたいと考えます。外国人保護者などを含めた異文化交流を体験する機会も増やし、さらには国際社会や文化への理解を深めるために、日本文化(音楽や伝統行事・芸能など)について触れる機会を設けたいと考えています。



●イベントレポート

聖学院大学の留学生が幼稚園児と交流

2017年2月2日(木)、聖学院大学人間福祉学部こども心理学科の1年生でケニア出身のドリスさん、3年生でタイ出身のヌンさんが、聖学院みどり幼稚園を訪問しました。留学生が、みどり幼稚園を訪問するのは初めてです。

開設当初より国際理解や国際交流を大切にしてきたみどり幼稚園では、今でも毎週、年中・年長の園児は、ネイティブの先生による「英語の時間」を通じて、国際理解を深めています。このたび、山川園長先生からの呼びかけで、子どもの心のケアを学ぶこども心理学科の留学生と金谷京子先生が幼稚園を訪問し、交流の時間を持つことになりました。

この日の11時、全園児約90名がプレイルームに集

まり、交流会がスタートしました。園児みんなで留学生歓迎の『アブラハムの子』の楽しいダンスを踊りました。

続いて留学生のプレゼンテーションです。まずは、ヌンさんが出身国タイでの動物、食べ物、子どもの歌やダンスを紹介しました。また、タイで人気の、日本マンガ『ちびまる子ちゃん』の歌をウクレレで弾き語り。園児たちと一緒に、大きな声で一緒に歌いました。

次は、ケニアのドリスさんのプレゼン。ヌンさんと同様、動物、食べ物を紹介した後、みんなと一緒に、ケニアで歌われている子どもの歌に振りをつけて踊りました。



サービスラーニングで、学校の看板の周りにペコニアを植えました

聖学院アトランタ国際学校

(米国アトランタキャンパス)

聖学院アトランタ国際学校（セインツ）は、アメリカ・ジョージア州のアトランタの中心地にあるオグルソープ大学の広大なキャンパスの一角に1990年に開設、2003年に現在のキャンパスが与えられました。平和を創り出す国際人の育成を目標として、日米両文化の良さを結びつける役割を果たすため、先駆的な教育実践をしています。特に日本語と英語の二言語を習得する「ツウウェイ・イメージョン教育（Dual Language教育）」に力を入れています。

Dual Languageは第二言語習得において高い成功を収めるプログラムとして、全米30州において700校を超えましたが、実際

Dual Language教育において両言語で高いレベルを維持することは容易ではありません。しかし、セインツの卒業生は日英バイリンガル能力が高いため、注目されるようになり、多くの実績をあげるようになりました。

また、セインツは皆様のご支援により、現地の日本人子女教育に大切な教育機関であるというアトランタ日本人社会の総意により、ジョージア州日本人商工会の賛同書を取得し、総領事館の全面的サポートも受ける存在に成長し、外務省や文科省からの補助を受けております。日米の友好関係促進のために寄与したことを理由に、12月には外務省アトランタ総領事館より、在外公館長

表彰状をいただきました。ここ数年は、3歳から12歳まで、9年間のバイリンガル教育を受けさせるために、セインツのそばに、遠隔、他州からも引っ越してこれられるご家族が増えています。

また、このたび、パナソニック教育財団の

「実践研究助成」助成先として、一年間実践研究活動を推進した結果、佳作に選ばれました。

引き続きご支援いただきますようお願いいたします。



外務省アトランタ総領事館より在外公館長表彰状をいただきました

聖学院の先駆者、宣教師 5

1903年に聖学院神学校を開設した
H・H・ガイ博士

聖学院創立百周年期間であった2004年の5月、聖学院は、学校長等5名からなる、調査ミッション団をアメリカに派遣し、聖学院ゆかりのミッショナリー達の墓参も行ないましたが、聖学院中高の創設者、ハーヴェイ・ヒュー

ゴ・ガイ博士だけは墓所が分からずじまいでした。

2016年1月、在米の元ディサイプルの牧師で、現在カネコ・アンド・アソシエイツという高等教育専門の人材紹介業をやっておられる、金子信義代表取締役より、阿久戸光晴前理事長に面談の申し込みがありました。その際、ガイ博士の墓所が不明であることを申し上げたところ、調査方法をいくつか教えていただきました。

その方法の一つである、博士号を修得したイエール大学のアーカイブを調べたところ、1936年（博士の没年）の墓碑録に記述があることが判明しました。そこで金子信義氏に墓所Oakdale Memorial Park（カルフォルニア州）に出向き、撮影をお願いしました。



ガイ先生の墓のある、Oakdale Memorial Park



ガイ博士の墓（2017年4月撮影）